

港の片付け 漁師さんと汗を流す

全国青年ボランティアセンターは29日、陸前高田市にある小さな港、黒崎漁港にお手伝いに行きました。地元の漁師さんたちといっしょに、津波で流されてきたガレキを片付ける作業です。捜索活動があったので、四十九日（4月28日）まであまり手をつけてきませんでした。

港には、流木などにまじって、家の残骸も流れ着いていました。一つひとつ拾い集め、燃やしました。

漁師さんたちの「あの日」

漁師さんたちは、いっしょに汗を流して働くボランティアに「あの日」のことを話してくれました。ものの2～3分で津波がきたこと、津波がくる前の引き潮のときは1km先まで深い海底がみえたこと、みんなで大慌てで逃げたこと…。

漁師のなかに20代の兄弟もいました。お兄さんが養殖業を始めるというので、弟さんが3月に関東から戻ってきた矢先に、地震がおきました。「東京も電車が止まったりして、大変だったでしょう」と弟さんが尋ねてきて、お互いのあの日のことを交流。い

っしょに汗を流し、楽しく会話して仲良くなりました。

昼過ぎまでに漁港の半分が片付けました。漁師のおじさんは「こんなにすぐには奇麗になるとは思わなかった」「じつは隣の漁港は、もっとひどい状況ですよ」と話してくれました。

海に生きるということ

潮が満ちてくる前に作業をきりあげ、岬の突端にある展望台に行きました。黒崎漁港のすぐそばです。見渡す限りの青い海。地球って丸いんだなと実感でき、真っ青な空と背後の新緑とのコントラストが本当に奇麗でした。

「この海が、真っ黒い濁流になって人々の生活をすべて奪い去ったなんて信じられない。この海をみていると、すべてを失った漁師さんたちが『俺たちは海と生きるしかないんだ』という気持ちが、少しわかる気がした」。感想を交流しあい、5月に旬を迎えるアワビやウニの漁が一日でも早くできるように、と決意を新たにしました。

仙台に支所開設 米や野菜を届ける

仙台市内にセンターの支所をひらき、宮城県内の被災地での活動をはじめました。29日は東松島市へ、救援物資を届けました。床上60センチまで浸水した地域で、ハンドマイクで案内しながら物資を渡しました。

米、野菜、じゃがいも、トイレトペーパー…。被災者にどんどん手渡ししながら、話を聞きました。「この地域は給水車が一度きたきりなので、本当に助かる」「お米がほしい。車が流されて2～3キロ先のスーパーに買い物

に行けなかった」など、とても歓迎されました。

仙台市にすむSさんは、チラシをみてボランティアに飛び込み参加。「何かしたいと思ってはいたけど、今まできっかけがなかった」といいます。はじめは、よく知らない団体だし、自分みたいな初心者が来ていいのか不安もありました。移動の車中などでお互いのことをざっくばらんに交流するなかで打ち解け、「楽しかった。また来てみたい」と話してくれました。